



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

16

長 塚 節
鈴木三重吉
中 勘 助

中央公論社

日本の文学 16

©1969

長 塚 節
鈴木三重吉
中 勘 助

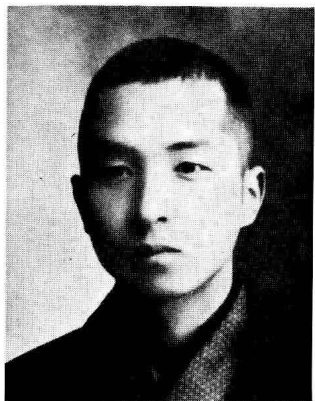
昭和44年9月5日初版発行
昭和46年9月25日3版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34



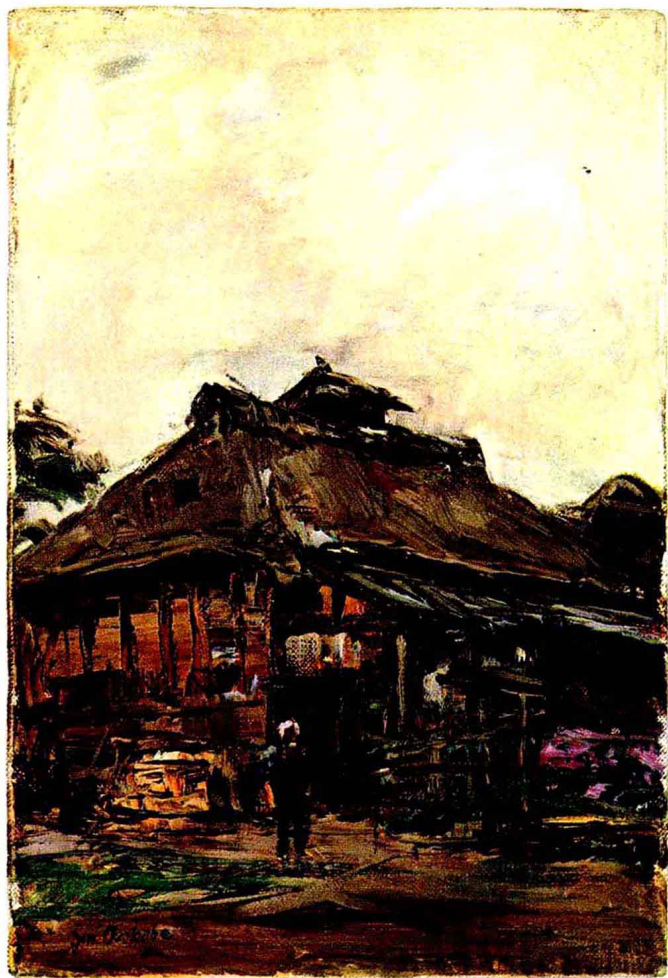
長塚 節
明治44年



鈴木三重吉
大正8年



中 勘助
昭和28年



「土」 刑部 人画

目次

長塚 節

土

鈴木三重吉

千 鳥

山 彦

桑の 実

中 勘 助

銀の 匙

5

235

257

280

377

菩提樹の蔭

注 解
解 説
年 譜

口 絵
挿 画

山 本 健 吉

534 518 507 477

「土」
「土」

「千鳥」「山彦」「桑の実」

「銀の匙」「菩提樹の蔭」

刑 部 人
刑 部 人

深 沢 紅 子

北 岡 文 雄

長 塚 節

烈

しい西風が目に見えぬ大きな塊をごうつと打ちつけてはまたごうつと打ちつけて皆瘦せこけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひゅうひゅうと悲痛の響きを立てて泣いた。短い冬の日はもう落ちてかけて黄色な光を放射しつつ目叩いた。そうして西風はどうかするとぱたり止んでしまったかと思うほど静かになった。泥をちぎって投げたような雲が不規則に林の上にじつとひつついていて空はまだ騒がしいことを示している。それで時々は思い出したように、木の枝がざわざわと鳴る。世間がにわかには心ほそくなった。

お品はまた天秤をおろした。お品は竹の短い天秤の先へ木の枝で拵えた小さな鍵の手をぶらさげてそれで手桶の柄を引っかけていた。お品は百姓の隙間には村から豆腐を仕入れて出ては二三カ村を歩いて来るのが例である。

手桶で持ち出すだけのことだから資本も要らない代りに儲けも薄いのであるが、それでも百姓ばかりしているよりも日ごとに目に見えた小遣銭が取れるのもうしばらくそうしていた。手桶一提げの豆腐ではいつものところをぐるりと廻ればきつとなくなった。還りには豆腐の壊れで幾らか白くなった水を棄てて天秤は軽くなるのである。お品はいつでも日のあるうちに夜なべに縄に縋う薬へ水をかけておいたり、落葉を攫って見たりそこらこらと手を動かすことを止めなかった。天性が丈夫なのでお品は仕事を苦しいと思ったことはなかった。

それがこの日は自分でもひどく厭であつたが、冬至が来るから蒔蒔の仕入れをしなくちゃならないといって無理に出たのであつた。冬至というといふと俄商人がぞくぞくとできるので急いで一遍歩かないと、その俄商人に先を越されてしまうのでお品はどうしてもじつとしてはいられた。蒔蒔は村にはないので、仕入れをするのは田圃を越えたり林を通ったりして遠くへ行かねばならぬ。それでお品はその途中で商いをしようと思つてこの日も豆腐を担いで出た。あいにく夜から冴えきつていた空には烈しい西風が立つて、それに逆らつて行くお品は自分でひどく足もとのふらつくのを感じた。ぞくぞくと身体が冷えた。そうして豆腐を出すたびに水へ手を刺し込むのが、慄えるように身に染みた。かさかさに乾燥い

た手が水へつけるたびに赤くなった。戦がびりびりと痛んだ。懇意なここでお品は落葉を一燵べ焚いてもらつては手を翳してや々と暖まつた。蒟蒻を仕入れて出た時はそんなこんなで暇をとつていつになく遅かった。お品は林を幾つも過ぎて自分の村へ急いだが、疲れもしたけれど頼いような心持がして幾たびか路傍へ荷をおろしては休みつつ来たのである。

お品は手桶の柄へ横たえた竹の天秤へ身を投げかけてどかりと膝を折つた。ぐつたりなつたお品はそれでなくともみじめな姿がさらにしどけなく乱れた。西風の余波がお品の後から吹いた。そうして西風は後で括つた穢い手拭の端を捲つて、油の切れた埃だらけの赤い髪の毛を扱きあげるようにしてその垢だらけの首筋を剝出しにさせている。それとともに林の雑木はまだ持前の騒ぎを止めないで、路傍の梢がずっと撓つてお品の上からそれを覗こうとすると、後からも後からも林の梢が一斉に首を出す。そうしてしばらくしてはまた一斉に後へぐつと戻つて身体を横に動揺ながら笑い私語くようにざわざわと鳴る。

お品は身体に変態を来したことを意識するとともに恐怖心を懷き始めた。三四日どうもなかったのだから大丈夫だとは思つて見ても、こうじつとしていると遠くの方へ滅入つてしまふような心持がして、不分から幾らか逆

上性でもあるのだがそう思うと耳が鳴るようで世間がかえつて静かになつてしまつたように思われた。ふと気がついた時お品はきはきとして天秤を担いだ。林がつきて田圃が見え出した。田圃を越せば村で、自分の家は田圃のとりつきである。青い煙がずっと騰っている。お品は二人の子供を思つて心が跳つた。林の外れから田圃へおりるところはわずかに五六間であるが、勾配の峻しい坂でそれが雨のあるたびにそこらの水を聚めて田圃へ落す口になっているので自然に土が抉られて深い窪みが形づくられている。お品は天秤を斜めに横へ向けて、右の手を前の手桶の柄へ左の手を後の手桶の柄へかけて注意しつたりした。それでもほとんど手桶一杯になりそうな蒟蒻の重量は少しふらつく足を危く保たしめた。やつと人の行き違うだけの狭い田圃をお品はそろそろと運んで行く。お品は白茶けたほど古くなつた股引へそれでも先の方だけ継ぎ足した足袋をはいている。大きな藁草履は固めたように霜解けの泥がくつついて、それがぼたぼたと足の運びを鈍くしている。狭く連なっている田を豎に用水の堀がある。二三株比較的大きな榛の木立っているところにお品は橋の袂でちよつと立ち止まつた。そうして近づいた自分の家を見た。村落は台地にあるのでお品の家の後はすぐに斜めに田圃へずり落ちそうな林である。櫓や雑木の

間に短い竹が交っている。いい加減大きくなった櫓の木は皆葉が落ち尽しているで、その小枝を透して凹んだ棟が見える。白い羽の鶏が五六羽、がりがりと爪で土を掻っ掻いては、嘴でそこを啄いてまたがりがりと土を掻っ掻いては余念もなく夕方の飼料を求めつつ田圃から林へ還りつつある。お品は非常な注意をもって斜めな橋を渡った。四足目にはもう田圃の土に立った。その時は

日はとうに没して見渡す限り、田から林から世間はただ黄褐色に光ってそうしてまだ明るかった。お品は田圃からあがる前に天秤をおろして左へ曲った。自分の家の林と田との間には人の足跡だけの小径がつけてある。お品はその小径と林との境界を劃っている牛胡顔子の側に立った。鶏の爪の趾がその新しい土を掻き散らしてあった。お品は土を手で聚めて草履の底でそくそくとならした。お品の姿が庭に見えた時には西風は忘れたように止んでいて、庭先の栗の木にぶっつけた大根の乾びた葉も動かなかつた。白い鶏はお品の足もとへちよろちよろと駈けて来て何か欲しそうにけろっと見上げた。お品は平常のように鶏などへ構ってはおられなかつた。お品は戸口に天秤をおろして突然

「おつう」と喚んだ。

「おつかあか」とすぐにおつぎの返辭が威勢よく聞えた。それと同時に竈の火がひらひらと赤くお品の目に映った。

朝から雨戸は開けないので内はうす闇くなっている。外の光を見ていたお品の目にはすぐにはおつぎの姿も見えなかつたのである。戸口からではおつぎの身体は竈の火を掩うていた。返辭するとともに身体を振ったのでその赤い火が見えたのである。

おつぎの背にいた与吉はお品の声を聞きつけると

「まんまんま」と両手を出して下りようとする。お品はおつぎが帯を解いてる間に壁際の麦藁俵の側へ蒟蒻の手桶を二つ並べた。与吉はお袋の懐に抱かれてろくに出もしない乳房を探った。お品は竈の前へ腰をかけた。白い鶏は掛梯子の代りにかけてある荒縄でぐるぐる捲きにした竹の幹へてんでに爪を引っかけて両方の羽を拡げて身体の平均を保ちながら慌てたように蹲へあがつた。そうして青い煙の中にじっとして目を閉じている。

お品は家に帰って幾らか暖まったがそれでも一日冷えたせいかぞくぞくするのが止まなかつた。そうして後に近所で風呂を貰ってゆっくり暖まったら心持も癒るだろうと思つた。竈には小さな鍋がかかっている。汁は蓋を漂わすようにしてぐらぐらと煮立っている。外もいつかとつぷり闇くなつた。おつぎは竈の下から火のついてる甕架を一つとって手ランプを点けて上り框の柱へかけた。お品はおつぎが単衣へ半纏を引っかけたままであるのを見た。平常ならそんなことはないのだが自分がひどくぞ

くぞくとして心持が悪いのでつい気になって

「おつう、そんな姿で汝や寒かねえか」と聞いた。それから手拭の下から見えるおつぎのあどけない顔をじっと見た。

「寒かあんめえな」おつぎは事もなげにいった。与吉は懷の中でしきりにせがんでいる。お品は平常のようでも何も買つて来なかつたので、ふと困つた。

「おつう、そこらに砂糖はなかつたつけけえ」お品はいつた。おつぎは黙つて草履を脱ぎ棄てて座敷へ駈けあがつて、戸棚から小さな古い新聞紙の袋を探し出して、自分の手の平へ少し砂糖をつまみ出して

「そらそら」といいながら、手を出して待っている与吉へやつた。おつぎは砂糖の附いた自分の手を嘗めた。与吉はその砂糖をお袋の懷へこぼしながら危なそうにつまんで口へ入れる。砂糖がつきた時与吉はそのべとついた手をお袋の口のあたりへ出した。お品は与吉の両手を攫まえて舐つてやつた。お品は鍋の蓋をとつて匏朶の焰を翳しながら

「こりや芋か何でえ」と聞いた。

「うむ、少し芋足して暖め返したんだ」

「おまんまは冷たかねえけ」

「それから雑炊でも拵えべと思つてたのよ」

お品は熱い物なら身体が暖まるだろうと思ひながら、

自分はひどく懶いので何でもおつぎにさせていた。おつぎは粘りけのない麦の勝ったぼろぼろな飯を鍋へ入れた。

お品は匏朶を一燵べ突つこんだ。おつぎは鍋をおろして茶釜をかけた。ほうつと白く蒸氣の立つ鍋の中をお玉杓子で二三度掻き立てておつぎはまた蓋をした。おつぎは戸棚から膳を出して上り框へ置いた。柱に点けてある手ランプの光が届かぬのでおつぎは手探りでしている。お品は左手に抱いた与吉の口へ箸の先で少しづつ含ませながら雑炊をたべた。お品は芋を三つ四つ箸へ立てて与吉へ持たせた。与吉は芋を口へ持つていつてすぐに熱いというて泣いた。お品は与吉の頬をふうふうと吹いてそれから芋を自分の口で噛んでやつた。お品の茶碗はこうして冷えた。おつぎは冷たくなった時鍋のと換えてやつた。お品は欲しくもない雑炊を三杯までたべた。幾らか腹の中の暖かくなつたのを感じた。そうしてようやく水離れのした茶釜の湯を汲んで飲んだ。おつぎは庭先の井戸端へ出て鍋へ一杯釣瓶の水をあけた、おつぎが戻つた時

「おつう、今夜でなくつてもええや」とお品はいった。

おつぎは黙つて俵の側の手桶へ手をかけて

「これへも水入えておかなくっちゃなんめえ」

「そうすればええが大変だらええぞ」

お品がいいきらぬうちにおつぎは庭へ出た。すぐに洗つた鍋と手桶を持つて暗い庭先からぼんやり戸口へ姿を

見せた。闕へちよつと手桶を置いてお品と顔を見合させた。手桶の水は半分で兩方の蒟蒻へ水が乗った。

お品は三人連れで東隣へ風呂を貰いに行った。東隣と
いうのは大きな一構えで蔚然たる森に包まれている。

外は闇である。隣の森の杉がぞっくりと冴えた空へ突つ込んでゐる。お品の家は以前からこの森のために日がよほど南へ廻ってからでなければ庭へ光の射すことはなかった。お品の家族はどこまでも日蔭者であつた。それが後になつてから方々に陸地測量部の三角測量台が建てられてその上に小さな旗がひらひらと閃くようになってからその森が見通しに障るというので三本だけ伐らせられた。杉の大木は西へ倒したのでずしんとそこらを恐ろしく撼がしてお品の庭へ横たわつた。枝は挫けてその先が庭の土をさくつた。それでも隣ではその木の始末をつける時にそこらへ散らばつた小枝やその他の屑物はお品の家へ与えたので思いがけない薪ができたのと、も一つは幾らでも東が隙いたのとで、隣では自分の腕を斬られたようだと惜しんだにもかかわらずお品の家ではひそかに悦んだのであつた。それからというものはどんな姿にも日が朝から射すようになった。それでもさすがに森はあたりを威圧して夜になるとに聳然として小さなお品の家は地べたへ蹂みつけられたように見えた。

お品は闇の中へ消えた。そうして隣の戸口に現われた。

隣の雇人は夜なべの縄を綱つていた。板の間の端へ胡坐を掻いて足で抑えた縄の端へ藁を継ぎ足し継ぎ足してちよりちりと額の上まで揉み挙げては右の手を臂へ廻してくつと縄を後へ抜く。縄はそのたびに土間へ落ちる。お品は板の間に小さくなつてゐた。やがて藁がつきると傭人はてんでにその縄を足から手へ引にかけて迅速に数を計つては土間から手繰り上げながら、つながつたまま一房ずつに括つた。やがて彼らは板の間の藁屑を土間へ掃きおろしてそれから交代に風呂へはいつた。お品はそれを見ながら黙つて待つてゐた。お品はここへ来るとこ
ういう遠慮をしなければならぬので、少しは遠くても風呂はほかへ貰いに行くのであつたがその晩はどこにも風呂が立たなかつた。お品は二三軒そつちこつちと歩いて見ながら隣の門を潜つたのであつた。傭人は大釜の下にぽつぽつと火を焚いてあつてゐる。風呂から出て彼らは茹だつたような赤い腿を出して火の側へ寄つた。

「どうだね、一燵べあつたらようがしょう、今すぐに明くから」と傭人がいつてくれてもお品は臂から冷えるのを我慢してじつと辛棒してゐた。懷で眠つた与吉を騒がすまいとしては足の痺れるので幾度か身体をもじもじ動かしした。ようやく風呂の明いた時はお品は待遠であつたので前後の考えもなく急いで衣物をとつた。与吉は幸いにぐつたりとなつてお袋の懷から離れるのも知らない

のでおつぎが小さな手で抱いた。お品はだんだんと身体が暖まるにつれて始めて蘇生いしかんしたように恍惚うつろひとした。いつまでも沈んでいたいような心持がした。与吉が泣きはせぬかと心づいた時ろくに洗いもしないで出てしまった。それでも顔がつやつやとして髪が生え際が拭ぬぐつても拭つても汗ばんだ。そうしてしみじみと快かった。お品は衣物を引かけるとすぐと与吉を内懷うちぶとこへ入れた。お品の後へは下女がはいったので、おつぎはその間待たねばならなかった。おつぎが出た時はお品の身体は冷めかけていた。お品は自分が後ではいればよかったにと後悔した。

お品が自分の股引と足袋とをおつぎに提げさせて帰った時は月はひそかに隣の森の輪郭をはっきりとさせてその森の隙間がことに明るく光っていた。世間がしみじみと冷えていた。お品は薄い垢じみた蒲団ふとんへくるまると、身体がまたぞくぞくとして膝がしらが氷ったようになっていたのを知った。

二

次の朝お品はまだ戸の隙間から薄ら明りの射したばかりに眼が覚めた。枕を擡もたげて見たが頭の心がしくしくと痛むようでいつになく重かった。狭い家の内に羽叩はばたく鶏の声がけたたましく耳の底へ響いた。おつぎはまだすや

すやとして眠っている。戸の隙間が臉またを開いたように明るくなった時鶏がまた甲走かんじつて鳴いた。お品はおつぎを今朝はゆっくりさせてやろうと思っていた。それでもおつぎは鶏がまた鳴いた時むっくり起きた。いつもと違ってあまりひっそりしているので驚いたようにあたりを見た。そうしてお袋がまだ自分の傍に蒲団へくるまってるのを見た。

「おつう、せかねえでもええぞ、俺おら今朝少し工合ぐあいが悪わるいからゆっくりすっかなよ」お品はいった。おつぎはしばらくもじもじしながら帯を締めて大戸を一枚がらがらと開けて目をこすりながら庭へ出た。井戸端の桶かきには芋が少しばかり水に浸してあって、その水には水がガラス板ぐらいに閉じている。おつぎは鍋をいつも磨なぐいている砥石といしの破片かけで氷を叩いて見た。おつぎは大戸を開け放はなしておいたので朝の寒さが侵入したのに気がついて

「おっかあ、寒かかったか、俺おら知らねえでいた」いいながら大戸をがらがらと閉めた。闇くなった家の中には竈かまどの火のみが勢いよく赤く立った。おつぎは

「おお冷つるてえ」といいながら竈の口から捲まくれて出る焰ほのへ手を翳かざして

「今朝は芋の水氷こったんだよ」とお袋の方を向いていった。

「うむ、霜も降ったようだな」お品は力なくいった。戸

口を後にしてお品は竈の火のべろべろと燃え上るのを見た。

「どこでも真白だよ」おつぎは竹の火箸で落葉を掻き立てながらいった。

「夜明けにひどく冷や冷やしたつけかな」お品はいってちよつと首を擡げながら

「俺ら今朝はたべたかねえかな、汝構あねえでできたらたべた方がええぞ」お品はいった。また氷った飯で雑炊が煮られた。

「おつかあ、ちつとでもやらねえか」おつぎは茶碗をお袋の枕元へ出した。雑炊の焦げついたような臭いがぶんと鼻を衝いた時お品は箸を執つて見ようかと思つて俯伏しになって見たが、すぐに厭になつてしまった。お品が動いたので、懷の与吉は泣き出した。お品は俯伏したまま乳房を含ませた。そうしてまた芋の串を拵えて持たせた。

お品が表の大戸を開けさせた時は日がきらきらと東隣の森越しに庭へ射しかけてきつかりと日蔭を限つて解け残った霜が白く見えていた。庭先の栗の木の新葉から枝へかけた大根の葉からも霜が解けて雪がまだぼたりぼたりと垂れていた。庭へ敷いてある庭蓋の藁もただぐつしりと湿っている。冬になると霜柱が立つので庭へはみんな藁屑だの蕎麦幹だのが一杯に敷かれる。それが庭蓋

である。霜柱が庭から先の桑畑にぐらりと倒れつつある。

お品は蒲団の中でもめつきり暖かくなつたことを感じた。時々枕を擡げて戸口から外を見る。そうしては麦藁の側に置いた蒟蒻の手桶をどうかすると無意識に見つめる。横になっている目からは東隣の森の梢が妙に変わって見えるのでじつと見つめては目が疲れるようになるのでまた蒟蒻の手桶へ目を移したりした。お品はどうかして少しでも蒟蒻を減らしておきたいと思つた。お品はそのうちに起きられるだろうと考えつつ時々うとうととなる。

「切干でも切つたもんだかな」おつぎが庭から大きな声でいった時お品はふと枕を擡げた。それでおつぎの声は意味も解らずに微かに耳に入った。

しばらくたってからお品は庭でおつぎがざあと水を汲んでまた間を隔ててざあと水を汲んでいるのを聞いた。おつぎは大根を洗つた。おつぎは庭蓋の上に簀を敷いて暖かい日光に浴しながら切干を切りはじめた。大根を横に幾つかに切つて、さらにそれを豎に割つて短冊形に刻む。おつぎは飯台へ渡した俎板の上へとんとんと庖丁を落してはその庖丁で白く刻まれた大根を飯台の中へ扱き落す。お品は切干を刻む音を聞いた時先刻のは大根を洗つていたのだと思つた。お品は二三日以来もう切干も

切らなければならぬと自分が口について言っていたことを思い出して、おつぎがよく機転を利かしたと心で悦んだ。庖丁の音が兩戸の外に近く聞える。お品は身体を半分蒲団からずり出して見たら、手拭で髪を包んで少し前屈みになっているおつぎの後姿が見えた。

「大根は分ったのか」お品は聞いた。

「分ってるよ」おつぎは庖丁の手を止めて横を向いて返辞した。お品はまた蒲団へくるまった。そうしてまだ下手な庖丁の音を聞いた。お品の懷にいた与吉は退屈してせがみ出した。おつぎはそれを聞いて

「そうら、姉がとこへでも来て見ろ」といいながら忙しくぼっと一燵べ落葉を燃やして衣物を炙って与吉へ着せた。

「よきは利口だから姉がとこにいるんだぞ」お品はいった。おつぎは自分の簾の上へ抱いて行つた。おつぎの手は落葉の埃で汚れていた。再び庖丁を持った時大根には指の趾がついた。おつぎはその手を半纏で拭つた。与吉は側で刻まれた大根へ手を出す。

「あぶねえよ、さあこれでも持ってる」おつぎは切りかけの大根をやった。与吉はすぐにそれを嚙つた。

「辛くてしょうあんめえなよきは」おつぎは甘やかすようにいった。お品にはそれがよく聞えて二人がどんなことをしているのが分った。お品の耳には続いて

「ぼうんとしたか、そらそっちへ行っちゃった」という声がしたかと思うと

「こんだはぼうんとすんじゃねえかな」という声やそれからまた

「それ持ち出すんじゃねえ、聴かねえとこれで切つてやんぞ、赤まんまが出るぞおお痛え」などとおつぎのいうのが聞えた。そのたびに庖丁の音が止む。お品には与吉が悪戯をしたり、おつぎが痛いといつて指を啣えて見せれば与吉も自分の手を口へ当てているのが目に見えるようである。お品はおつぎを平常からやかましくしていたのでよその子よりも割合に動けると思っているけれど、与吉とふざけたりしているのを見るとまだ子供だということが念頭に浮ぶ。自分が勘次と相知つたのは十六の秋である。おつぎはこうして大人らしくなるであろうかといつになくそんなことを思つた。おつぎは十五であつた。午餐もお品は欲しくなかつた。自分でも今日は商いに出不れなかつた。明日になつたらばと思つていた。しかしそれは空願みであつた。お品は依然として枕を離れられない。さすがに不安の念が先に立つた。お品はつい近ごろ行つた勘次のことがしきりに思い出されて、こちであれほど働いて行つたのにきつと休みもしないで銭取りをしているのだらうと思うと、寒くてもシャツ一つになつて、後にはそのシャツの端が抜け出してよく臍